



内藤 幸男
NAITO Yukio

(公)日本下水道管路管理業協会
試験・研修部

102号の特集は「大口径管路の非開削建設技術」がテーマで、各工法の施工事例や難工事を施工可能にするための技術について具体的に紹介され、携わる皆様の厳しい施工条件を解決するための苦労と努力を感じさせられる内容でした。この特集記事から最新の非開削建設技術や推進力管理の重要性を学ぶことができました。

本技術が下水道事業において課題である“浸水被害の軽減”や“老朽管路対策”に貢献するものであることを認識しました。

また、「技術投稿」や「国内イベント報告」では、様々な内容のものが紹介され、参加していないイベント等の概要を知る事ができました。特にドローンによる調査技術については、下水道管路内調査の実用化に向けた取り組みや太陽光パネル点検ソリューション等が紹介され、多方面での活躍が期待されるものと感じました。

最後になりましたが、非開削技術の更なる発展を祈念しますとともに、今後も本誌を通して最新の技術を学びたいと思います。



三和 信二
MIWA Shini

(株)キャプティ
パイプライン営業企画部
テクノセンター

No. 102号の特集テーマは「大口径管路の非開削建設技術」であり、小口径管のHDD工法を行っている私にとっては縁の遠い技術とと思っていましたが、推進距離の長延長化を図るための推進力低減技術や、正確な推進を行うための推進位置計測装置等、工法システムの規模の差はあるけれど、求める所は同じであると感じました。

HDD工法においては小規模で仮設工事が不要な事が特徴であります、砂礫地盤への適用が難

しい等、適用できる土質には限りがありました。今回の特集記事の中にもHDD工法に適用できそうな滑財の使用法や排泥方法が照会されており、今後のHDD技術の向上のためにも参考にさせて頂きたいと思います。

また、No-Dig Todayでは、「身近な・Science」のような、普段は気にしないような事柄を科学しているコーナーが掲載されており、いつも「なるほど」と思いながら拝読させていただいています。今後も継続して掲載していただけると幸いです。



草茅 太郎
KUSAGAYA Taro

川崎地質(株)
戦略企画本部技術企画部

普段は物理探査をメインにした業務に携わっており、102号における非開削「建設」というのは、あまりなじみがありませんでした。しかし、推進自動測量やドローンによる下水道管路内調査法開発といった内容は、地下で物理探査を行う際には関係があると思興味深く読むことができました。

実際、地下壕調査など基準点の無いところでの探査の場合は、測量をしないと探査結果が平面図あるいは断面図上でどこに位置するのかが分かりません。しかも、物理探査の測定で得られる空間分解能に応じた測量精度が求められます。地下壕は折れ曲がったり分岐があったりと案外広いた

め、マニュアルでの測量は手間も時間もかかります。そのため、測量を迅速にかつ精度よく行うためには、推進自動測量が利用できるかもしれないと考えました。

また、下水道に入りこみ迅速に内部を調査できるドローンの存在は、老朽化した下水道管から上部の物理探査を行えるようなオプションをつけることで、吸出しにより発生しうる地下空洞探査に利用できるのではないかと考えました。

他業界の最新情報は良い刺激となりますので、今後もNo-Dig Todayから有益な情報を得ていきたいと思っています。